

<ヒアリング調査結果>

1940～1970年頃に太郎右衛門自然再生地で確認された種について、当該地の生物に詳しい方にヒアリング調査を行った結果を取りまとめたものである。

ヒアリングコメント		埼玉県レッドデータブック及び文献、図鑑により、かつての分布状況、生息環境を確認				種確定		
分類群	種名	いつ	どこで	だれが	どんな方法で	コメントからの想定種・同定理由	埼玉県RDBによる位置付け・記述	文献・図鑑による記述
ほ乳類	ニホンアナグマ	50年前にはいた。	上池	「荒川」編纂者	目視 ムジナと呼んでいた。 タヌキのことをムジナと呼ぶ人も多い。	ヒアリング調査対象者による同定	かつては、低地から亜高山帯まで県内各地に生息していた記録があるが、低地帯では、現在、全く生息に関する情報はなく、絶滅したと考えられる。 減少要因 - 森林減少、農業による餌となるミミズ等土壌生物などの減少、野良イヌの増加など	丘陵地から山地のササやぶ、林に生息し、長いトンネルを掘って生活する。夜行性で夜になると巣穴を出て、餌を求めて歩き回る。11月頃、巣穴で冬ごもりに入り、春に繁殖。初夏頃には家族群が見られる。(参考:日本の哺乳類)
鳥類	クイナ	30年前まではよく見られた。	中池	自然観察者	目視 多く生息していた。	ヒアリング調査対象者による同定	ヨシ原等の湿地や水田に生息。冬鳥として埼玉県内の低地帯から台地・丘陵帯にかけての水辺地に分布するが、近年確認記録の減少が著しい。 減少要因 - 埋立などによるヨシ原、泥湿地の減少	水田、湿地、小さい川、池沼などのヨシやマコモの茂る草むらが発達した水辺を好む。繁殖地では夏鳥らしく、越冬地では10月～翌2月頃まで見られる。(参考:野鳥の図鑑 水の鳥2)
	タマシギ	30年前までは見られた。	中池・下池	自然観察者 野鳥観察者	目視 生息していたが、江川流域のように多くはなかった。	ヒアリング調査対象者による同定	かつて、埼玉県内低地帯では普通に生息していたが、現在繁殖や越冬が確認されている場所は10ヶ所に満たない。 減少要因 - 水田の減少、耕地整理	本州・四国・九州・沖縄に分布。特に本州南西部で多く見られる。水田、湿地、水のある休耕地、川や池沼の水べりを好む。(参考:野鳥の図鑑 水の鳥2)
両生類	ニホンアカガエル	30年前までは普通に見られた。	上池	「荒川」編纂者	目視 多く生息していた。	ヤマアカガエル、タゴガエルに類似するが、県内の低地に多く生息していた本種と考えられる。	県内の低地から台地・丘陵地帯にかけて広く分布していた。 減少要因 - 圃場整備による産卵期の水辺消失、埋立による湿地減少、社寺林、屋敷林と水辺の分断	平地や丘陵の広葉樹林に生息し、1～3月の産卵期に浅い水辺に集まる。産卵場所となる湿地を残し、生息の場である広葉樹林を保全することが必要である。(参考:川の生物図典 1996年)
魚類	ホトケドジョウ	30年前までは普通に見られた。	上池	猟師	網による採捕により確認 体側に点のないドジョウがいた。	ドジョウには、体側に不明瞭な点があり、シマドジョウには明確な点があることから、本種と考えられる。	埼玉県内では、低山帯以下の比較的標高の低い地域の細流に広く生息していたと考えられる。 減少要因 - 湧水の枯渇、小河川の浅瀬を生息場とするため、河川工事による掘り下げ、護岸整備	流れの緩い場所の表層から底層にかけて生息。湧水の枯渇を防ぎ、落ち葉や日陰を供給する河畔林の消失を防ぐことが必要である。(参考:川の生物図典 1996年)
	ギバチ	30年前までは普通に見られた。	上池	「荒川」編纂者	釣りによる確認 パチッコと呼んでいた。	ヒアリング調査対象者による同定	荒川・利根川流域の中規模以上の本・支流で、中流域から上流域下部にかけて広く生息していた。 減少要因 - 本川の河川改修による平瀬化が進み、礫の隙間が埋まるため、生息環境・餌生物の減少	水のきれいな河川の上流下部から中流域にかけて生息。水質汚濁や河川改修による環境変化に弱い。(参考:川の生物図典 1996年)
	ヤリタナゴ	30年前までは普通に見られた。	中池	市史編纂者 「荒川」編纂者 猟師	釣りによる確認 マタナゴと呼ぶ。	本種の他、タナゴ、アカヒレタビラを区別せず、マタナゴと総称していたが、1970年初頭までは、本種が多産していたことから、本種と考えられる。	河川本流や大型湖沼を中心に生息する。埼玉県東部・東南部、荒川中流部で特に多く生息した。 減少要因 - 中小河川・用水路の改修・護岸整備等による二枚貝の減少、用水路の水量変化や濁水	河川の下流域や支流、灌漑用水、湖沼などに生息し、やや流れのあるところを好む。産卵床となる二枚貝を保護する必要があり、砂礫底、良好な水質などが必要である。(参考:川の生物図典 1996年)
軟体動物	ドブガイ	30年前までは普通に見られた。	上池	市史編纂者 「荒川」編纂者 猟師	目視 黒くて大きい二枚貝、普通カラスガイと呼ぶ。	カラスガイと誤認されることが多いが、本県産に限れば、8割くらいは本種を指す。本種は荒川低地でも目撃できることから、本種であると考えられる。 減少要因 - 水質悪化	中川低地から荒川低地、比企丘陵でも目撃できる。カラスガイとの誤同定が多い。聞き取りによりカラスガイと言われる8割程度はドブガイ。 減少要因 - 水質汚濁、河川・水田用水路などの整備	潟、池、川、水田などの浅水域の泥底や砂泥底のところに生息し、陽の当たる泥底に多い。タナゴ類の重要な産卵母貝となる。(参考:川の生物図典 1996年)
甲殻類	モクスガニ	30年前までは普通に見られた。	上池	「荒川」編纂者	目視 ハサミに毛が生えた大きなカニ。	ハサミに毛が生えていることから、ケガとも呼ばれ、かつては県内低地でごく普通に生息していたことから、本種であると考えられる。 減少要因 - 水質汚濁、河川・水田用水路などの整備	大河川の三角州帯や湾内に生息し、荒川及び利根川の河口から流れを遡り、埼玉県内の支川にまで達する。 減少要因 - 水質汚濁、河川・水田用水路などの整備	河川の上流部から河口域まで生息。海にすみつくものもいる。繁殖のために河川と海とを往復するので、移動を妨げないようにする必要がある。(参考:川の生物図典 1996年)
昆虫類	ゲンゴロウ	30年前までは普通に見られた。	上池	猟師	目視 生息していた。	類似種として、一回り小さいコガタゲンゴロウがいるが、過去の分布状況から、当地付近にも広く分布していた本種であると考えられる。 減少要因 - 農薬散布、埋立による生息環境悪化、採集行為	埼玉県内では、低山帯から低地帯にかけて広く分布していたが、低地帯では農薬散布等の影響により、既に絶滅したものとと思われる。 減少要因 - 農薬散布、埋立による生息環境悪化、採集行為	生息環境にとって、水生植物が非常に重要である。幼虫は水辺にはい上がって、土中で蛹になるため、水域と陸地の連続性を保つことが必要である。(参考:川の生物図典 1996年)
植物	ホザキノフサモ	30年前には普通に見られた。	上池・中池	自然観察者 猟師	目視 キンギョソウと呼んでいた。	ヒアリング調査対象者による同定	埼玉県内では旧版植物誌には北足立・北埼玉・南埼玉・北葛飾郡市に記録がある。暖温帯から冷温帯にかけての池沼や溝の水中に生育する。 減少要因 - 水質汚濁、農薬汚染	池沼や溝の水中に生える多年生水草。茎は長く伸びて分枝する。(1998年版 埼玉県植物誌)
	サクラソウ	30年前に生き残り地区として知られていた。	中池	市史編纂者	目視 バナと呼んでいた。	ヒアリング調査対象者による同定 文献 県の花・県の木・県の鳥、近藤米吉、昭和47年4月	中間温帯から冷温帯の山麓や川岸の低湿原野に生育する。埼玉県では荒川低地に見られる。浦和・上尾に自生。 減少要因 - 園芸採取、湿地埋立・開発	埼玉県内では荒川低地に分布し、湿地草原に生えるが、開発の影響で最近ではほとんど見られなくなった。県の花で田島ヶ原サクラソウ自生地は国特別天然記念物である。(1998年版 埼玉県植物誌)